

青森県立郷土館所蔵の東通村尻屋・尻労産更新世脊椎動物化石

島口 天

Vertebrate fossils of Pleistocene from Higashidori Village, Shiriya and Shitukari Area
from Aomori Prefectural Museum

SHIMAGUCHI Takashi

Key words : 尻屋動物群, 裂罅堆積物, 更新世, 下北半島, 青森県

はじめに

青森県下北半島北東端の東通村尻屋・尻労地区には、中生代付加体尻屋コンプレックス(鎌田, 2000)が分布し、日鉄鉱業株式会社尻屋鉱業所がその中の石灰岩体を採掘している。この石灰岩体に生じた裂罅を充填する後期更新世の堆積物や中期更新世の海成段丘堆積物中からは、保存状態の良好な脊椎動物化石が多く産出しており、陸生・海生の脊椎動物が混在する日本唯一の化石群集として重要である。これら脊椎動物化石群集全体は尻屋動物群(長谷川ほか, 1988)と呼ばれる。

ここでは、青森県立郷土館に収蔵されている尻屋動物群の未公表となっていた標本について、まとめて報告する。

1 尻屋動物群の研究史と産地

尻屋及び尻労地区における尻屋動物群の研究史について記し、産地1~4及び尻労安部洞窟の位置を図1に示す。

①尻屋地区

青森県立田名部高等学校で理科を教えていた中島全二は、1955年から始まった旧資源科学研究所(1971年に国立科学博物館と合併)の「下北半島の開発における基礎的研究」に参加し、1954年から津軽海峡側の石灰岩体の数地点で採集した化石や地形・地質等について報告した(中島・桑野, 1957; 中島, 1958)。この報告における化石産地は尻屋鉱業所の第1採石場(A地点)、グローリー運搬坑道内(B地点)、第2採石場の3カ所あり、いずれも石灰岩に生じた裂罅を充填した堆積物からの産出である。

長谷川ほか(1988)は、国立科学博物館が行った1987年度の「津軽海峡を中心とする地域の自然史科学的総合研究」の調査に際して、再度この地域の研究を進め、地形的に異なる2地点のものを中心に、その概要を報告した。この中では、中島・桑野(1957)及び中島(1958)における化石産地3カ所を、調査結果と合わせて次の産地1~3に整理している。さらに産地2と産地3は、地形的な位置からいってそれぞれ大矢・市瀬(1957)の第3・第4段丘と対比されると考えられることから、時代的な区分をしておく必要があるとした。また、両産地の化石

群集の種構成には大きな違いは見られないが、優勢種が明瞭に異なるため、これら脊椎動物化石群集全体を尻屋動物群と呼ぶこととし、これを *Panthera - Pinnipedia* 群集と *Canis - Mancalla* 群集の2つの化石群集に分けた。

Panthera - Pinnipedia 群集は産地2から産出し、トラと数種の鰐脚類で特徴づけられる。産地2の標高は約70mであり、上位段丘(第3段丘: 大矢・市瀬, 1957)に対比される。

Canis - Mancalla 群集は産地3から産出し、オオカミ、ヒグマ、バイソン属、ナウマンゾウ、マンカラ属および小型哺乳類、多種類の両生類、海陸混交の貝類群集により特徴づけられる。産地3の標高は約30mであり、下位段丘(第4段丘: 大矢・市瀬, 1957)に対比される。産地1の化石はこの群集に近い。

尻屋動物群の特徴として、オオカミ、ヒグマは大型の個体が目に付き、哺乳類、鳥類、貝類などそれぞれに海生と陸生の種が混在することをあげている。

次に、産地1~3の詳細について記す。

産地1

中島・桑野(1957)の第1採石場(A地点)である。ここでは大小3つの裂罅が発見され、北東よりの大きな裂罅を充填した堆積物から化石が産出した。裂罅堆積物は

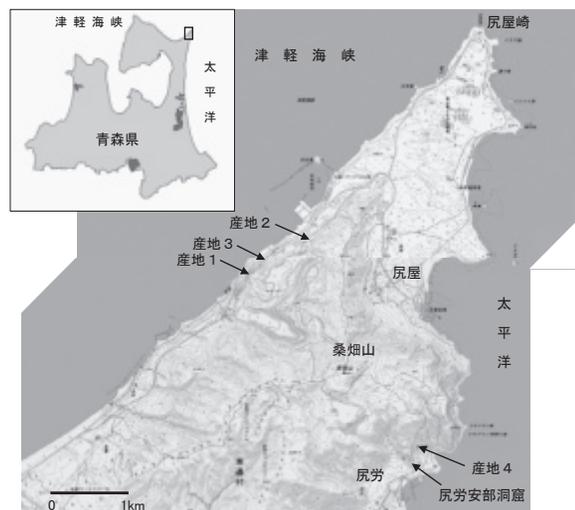


図1 尻屋・尻労地区の地形と化石産地

上位から順に第Ⅰ～Ⅲ層に区分され、第Ⅱ層と第Ⅲ層の境界付近から化石が産出し、第Ⅰ・Ⅱ層は流入したと考えられる赤土層、第Ⅲ層は石灰岩角礫が膠結された固い角礫層であった。第Ⅰ層と第Ⅱ層の境にはひん岩の大型円礫が一行に並んでいた。産出が報告されている化石は次の通りである。

Bos or Bison sp. ウシ属またはバイソン属の1種

Canis lupus lupus Linnaeus (larger type) ヨーロッパオオカミ(大型)

Capricornis crispus (Temminck) ニホンカモシカ

Megaceros sp. オオツノジカ属の1種

Microtus montebelli Milne-Edwards ハタネズミ

Nyctereutes procyonoides (Gray) タヌキ

Palaeoloxodon aomoriensis Tokunaga et Takai アオモリゾウ

Ursus arctos Linnaeus or Ursus spelaeus Rosenmuller ヒグマまたはホラグマ

Vulpes sp. キツネ属の1種

アオモリゾウについては、中島・桑野(1957)の図9の1に臼歯が掲載されており、東京大学の高井冬二が同定を行ったとされているが、歯種に関する詳細な記載はない。これと同じ化石は、長谷川ほか(1988)の図版4の8にナウマンゾウ右上顎第1大白歯(PV-9615)として掲載されている。また、同様に図9の3に掲載されている長鼻類の骨片と、図版4の1に掲載されているナウマンゾウ第6頸椎後面(PV-18992)が酷似しているが、図版4の説明には産地3から採取したとある。これらの標本は国立科学博物館で保管されている。

産地2

中島(1958)の第2採石場としたもの。ここは、産地1から直線距離にして約900m北東にある。第2採石場の北西側では、石灰岩層と暗緑色千枚岩層が接しているのがみられ、裂罅が石灰岩層の基底部に生じたものであることが観察された。裂罅堆積物は石灰岩角礫と多数の肢骨からなり、固く膠結された角礫岩ならびに軟らかい褐色火山灰状の粘土である。膠結された角礫岩に含まれる骨片は分離が困難で、粘土にも多くの骨片が含まれる。これらの化石についての報告はない。

長谷川ほか(1988)では、堆積物は標高80m付近にわずかに残っていると記載されており、おそらくノッチ状の地形に堆積した海浜性礫層の延長にあたるものと思われるが、採石のため破壊され、ほとんど形態を知ることができないとある。一方、ノッチ状の地形に堆積した海浜性堆積物から産出した化石は、陸生では *Panthera tigris* トラ、*Cervus sp.* シカ属を主体として、*Mustela sp.* イタチ属の一種、cf. *Lepus sp.* ノウサギ属に比較される種など若干の中型哺乳類が見られるが、小型種は種数、個体数とも少ない。一方で、鱈脚類は際立って多い。

産地3

中島・桑野(1957)のB地点を含むグローリー運搬坑

道内である。産地1の北北東250mに石灰岩を大規模に採集するためのグローリー運搬坑道があり、そこから南南西方向に水平坑道が伸び、坑道口から32～37mの間に認められた裂罅がB地点である。B地点は、産地1から南東に延びる小谷の直下に当たる。この小谷の南斜面には、従来から知られている鍾乳洞があるが、B地点の裂罅との関係はわかっていない。

B地点の裂罅は、裂罅の天井に近い部分だけが坑道の壁に露出しているもので、坑道底面に掘り込んである排水路の底からの高さは1mしかない。坑道西壁には、裂罅の上方開口部につながると考えられる狭い通路が、約3m上方まで延びている。裂罅堆積物の基質は流入したと思われる赤土で、石灰岩角礫を多数含むが、狭い通路に角礫は見られない。この堆積物から多数の大型哺乳類化石が発見され、また、角礫の少ない基質からは小型の動物化石やマイマイの殻片、カエル類骨片が多数発見された。中島・桑野(1957)でB地点から産出が報告されている化石は次の通りである。

Bos or Bison sp. ウシ属またはバイソン属の1種

Megaceros sp. オオツノジカの1種

Microtus montebetti Milne-Edwards ハタネズミ

中島(1958)では、このほかに小型動物として哺乳類10種、爬虫類2種、両生類5種、魚類1種の産出が報告されている。

長谷川ほか(1988)では、B地点は1957年8月には護壁の巻立てにより観察が不可能な状態になったということで、1987年7月に化石を採集した厚さ数10cmの含石灰岩角礫粘土層はB地点の延長の可能性のあるものの、正確を期すため区別してトンネル第2地点とした。また、トロッコのレールを挟んで第2地点の反対側で長谷川が1960年代に化石を採集した含石灰岩角礫粘土層をトンネル第1地点とした。いずれも水洗処理して化石を採集し、小型動物が多く、齧歯類、鳥類、両生類は種数・個体数ともに多い。イルカ類や鱈脚類も少々含まれる。共産する貝化石は陸生15種と海生8種が含まれる。海浜性堆積物と思われるひん岩を主とする直径1～2cmの扁平な円礫を多く含む。

②尻労地区

産地4

長谷川ほか(1988)では、尻屋地区の化石産地1～3に加え尻労地区の産地4について記載がある。ここでは、尻労側の岩体に坑道を掘った時に大量のゾウ化石が産出し、尻屋鉱業所や地元住民など各所に散逸したようで、地質的情報はないと記載されている。

この坑道については、島口(2001)で次のようにまとめている。坑道は桑畑山(標高400m)の南東麓に広がる標高30～40mの海成中位段丘面から桑畑山に掘られたもので、入口は尻労の集落から北東へ約700mの位置にある。1970年3月に尻屋鉱業所が尻屋・尻労を結ぶ鉱石運搬用坑道として計画し、尻屋・尻労両方から工事を

表 1 青森県立郷土館所蔵の尻屋・尻労地区産出尻屋動物群

種名	部位	収蔵番号
Carnivora 食肉目		
<i>Ursus arctos</i> Linnaeus ヒグマ	右上顎犬歯	1962-65
	右大腿骨	1962-57
	左大腿骨	1962-66
	右踵骨	1962-67
<i>Panthera tigris</i> (Linnaeus) トラ	右上顎犬歯	1962-59
	左下顎犬歯	1962-68
	右下顎第1臼歯	1962-60
	中手または中足骨	1962-78
	基節骨	1962-76
<i>Zalohus californianus</i> (Lesson) ニホンアシカ	歯	1962-42~47
	右下顎犬歯	1962-72,73
	左下顎骨	1962-92
<i>Callorhinus ursinus</i> (Linnaeus) キタオットセイ	右上顎犬歯	1962-69
	左下顎犬歯	1962-70
	右下顎犬歯	1962-71
	左脛骨	1962-88
Proposcidae 長鼻目		
<i>Palaeoloxodon naumanni</i> (Makiyama) ナウマンゾウ	右上顎骨片+第1大白歯	1962-63
	右上顎第1大白歯	1962-64
	脛骨(近位端)	1962-84
	右下顎第1大白歯	323
	右上顎第1あるいは第2大白歯	533
	左下顎第2大白歯	861
	左下顎第3大白歯	1856-1
	左上顎第2あるいは第3大白歯	1856-2
	切歯片	1856-3
	左下顎第2あるいは第3大白歯	1975-1
	右上顎第2あるいは第3大白歯	1975-2
	右下顎第2あるいは第3大白歯	1975-3
	右下顎第3大白歯	1975-4
	左上顎第2大白歯	1975-5
	右下顎第3大白歯	1975-6
	左上顎第2あるいは第3大白歯	1975-7
	右下顎骨片	1975-8
Artiodactyla 偶蹄目		
<i>Cervus nippon</i> Temminck ニホンジカ	左下顎小白歯	1962-48
	下顎第3大白歯	1962-50
	左肩甲骨	1962-83
	上腕骨	1962-75
	尺骨(近位)	1962-87
	脛骨(遠位端)	1962-93
	右距骨	1962-77
<i>Sinomegaceros yabei</i> (Shikama) ヤベオオツノジカ	左側頭~後頭骨	1962-74
	顎の一部	1962-7,20
	歯付き顎	1962-13,32
	歯付き左下顎骨	1962-56
	歯付き下顎骨	1962-58

<i>Sinomegaceros yabei</i> (Shikama) ヤベオオツノジカ	左下顎骨	1962-55
	上顎小白歯	1962-49
	右下顎第2大臼歯	1962-51
	下顎骨	1962-94
	頬骨	1962-80
	脊椎	1962-10,22,37
	肩甲骨下部	1962-36
	上腕骨頭(近位端)	1962-81
	上腕骨上部	1962-1,4,15
	上腕骨(遠位端)	1962-96
	橈骨上部?	1962-28,34
	橈骨下部	1962-9,11,12
	左橈骨(遠位端)	1975-9
	橈骨(遠位端)	1962-85
	中手骨	1962-52
	手根骨	1962-90
	大腿骨(遠位端)	1962-91
	脛骨下部	1962-25
	脛骨	1962-86
	脛骨(遠位端)	1962-89,95
	足根骨	1962-16,18,24
	足根骨(踵)	1962-2,19,23
	踵の一部	1962-26
	距骨	1962-31,35,41,79
	中足(手)骨下部	1962-5,8,27,40
	中足骨	1962-53,54
	中足骨	1962-6・30 ※接合
	中足骨(遠位端)	1962-82
第1指(趾)骨	1962-3,14,17,33,39	
第2指(趾)骨	1962-21,29,38	

Stylommatophora マイマイ目

Euhadra decorate diminuta Toba et Kuroda ナンブマイマイ 1856-4~20

※収蔵番号 1962 は尻屋地区産出, 323・533・861・1856・1975 は尻労地区産出

※収蔵番号 323・533・861・1856-1~3 の歯種同定は島口(2001)に, 1975 の歯種及び部位同定は高橋ほか(2006)による。ただし, 533 は高橋ほか(2006)で第2大臼歯にすべきと考えられ, 1975-1~3 は第3大臼歯の可能性が高いとしている。

始めたところ, 4月12日になって入口から30~50m奥の地点でゾウの切歯や顎のような骨, 臼歯などが発見され, 重さにして10数kg分も運び出したと報道されている。化石産出地点では, 暗青灰色粘土や赤褐色粘土, 石灰岩, チャートの礫が混在する地層が見られ, この混在層は坑道上方付近に存在する埋没したウバーレの底部堆積物と推定される。この混在層より奥には石灰岩の岩体が見られる。その後, 4月16~18日に京都大学理学部地質学鉱物学教室の瀬戸口烈司・亀井節夫両氏による調査が行われ, 化石はナウマンゾウであると判明した。産出した化石については, 京都大学に運ばれたもののほかは鉱山関係者から地元の人々に渡り散逸してしまったよ

うだが, 地元住民3名と尻労小学校で保管されていた標本については島口(2001)で報告している。混在層からは, ナウマンゾウと共にマイマイ属の化石としてナンブマイマイが産出している(島口, 2010)。

京都大学による調査で同大学に運ばれた化石については, ナウマンゾウ4点について放射性炭素年代測定を行った結果, 3点から $31,470 \pm 160$ ~ $23,570 \pm 130$ 年BPの年代が得られ, 尻労産化石は後期更新世後期(MIS3~2)にあたる時代の標本であることが判明したことを高橋ほか(2006)が報告している。

尻労安部洞窟

産地4の200mほど南南西に離れた場所にある尻労安

部洞窟(標高約 33m)では、2001 年度から慶応義塾大学ほかからなる尻労安部洞窟調査団による発掘調査が行われている。この調査における報告書(奈良ほか編, 2015)では、洞窟内の堆積物から出土した有機質遺物の放射性炭素年代を測定した結果、後期更新世の層準の堆積物は約 35,000 ~ 17,000 年 BP (約 39,000 ~ 20,000 年 calBP)と考えられた。この堆積物から採集された小型哺乳類は兎目と齧歯目に大別され、その大部分は後者であり、その内容から当時の洞窟周辺は草原が卓越するが森林も点在する、あるいは草原に接して森林が広がる環境と推定された。また、クマ科の歯 4 点が出土し、大型であることからヒグマに同定された。陸産貝類としてムツヒダリマキマイマイも出土しているが、島口(2010)のナウマンゾウと共産したムツヒダリマキマイマイの亜種ナンブマイマイに対して、岩手県宮古市の島嶼をタイプ産地とするナンブマイマイは下北半島の群より殻高が高く、下北半島の群はムツヒダリマキマイマイの中の周辺部で平行的に小形個体群を形成し、安定した形質を示す可能性が高いことから、下北半島の群は広義のムツヒダリマキマイマイとしている。

奈良ほか編(2015)では、産地 4 で採取された慶應義塾大学所蔵のヤベオオツノジカ下顎骨、地元郷土史研究者によって産地 4 周辺から採集されたナウマンゾウ臼歯、桑畑山地区で産出したとされる大型シカ脛骨について放射性炭素年代測定を行い、ヤベオオツノジカ下顎骨は約 32,000 ~ 31,000 年 calBP、ナウマンゾウ臼歯は約 39,000 ~ 37,000 年 calBP、大型シカ脛骨は約 28,000 ~ 27,000 年 calBP という結果を報告している。先述の高橋ほか(2006)で産地 4 から産出したナウマンゾウ臼歯から得られた放射性炭素年代値は約 36,000 ~ 28,000 年 calBP に相当し、大きな差異はない。

2 青森県立郷土館所蔵の尻屋動物群

青森県立郷土館が所蔵する尻屋動物群について尻屋地区と尻労地区に区分して記し、表 1 にそのリストを示す。

①尻屋地区標本

1954 年以降に中島全二が採集したものを、中島没後に橘善光が譲り受けて保管していた標本からなる。採集年月日及び採集地は不明、中島の残したノートにも記録はない。青森県史編纂室が 1996 年から調査を行い、TATI001 ~ 212 の番号を付け、同定ができたものについて報告している(波多野ほか, 1999)。2005 年に橘から県立郷土館に寄贈された(収蔵番号 1962)。寄贈時は、波多野ほか(1999)で種同定されていた 60 点を登録し、それ以外の標本は参考資料とした。これに橘から国立科学博物館の甲能直樹氏に貸し出されていて返却された 11 点、参考資料の中で甲能氏による同定が行われた 23 点を加え、計 94 点となっている。

最も数が多いのはヤベオオツノジカで、様々な部位が見られる。明らかにヤベオオツノジカより小型のものは

ニホンジカとした。ヒグマ、トラ、ニホンアシカ、キタオットセイ、ナウマンゾウは歯が主である。波多野ほか(1999)でエゾシカ(=ニホンジカ)とされていた TATI006・007 は、当館に寄贈された後(収蔵番号 1962-61・62)、長谷川善和氏によりそれぞれウマ類の右第 3 中足骨・左第 3 中足骨であることが判明し、現生標本の可能性が高かったため放射性炭素年代測定を行った結果、江戸時代のものであることが判明した(島口・高橋, 2016)。これによりこの 2 点は表 1 に掲載していない。

②尻労地区標本

1970 年 4 月に坑道内で産出した化石の一部、計 32 点である。内訳は、尻屋鉱業所職員から個人が譲り受けたナウマンゾウ臼歯 3 点(収蔵番号 323・533・861)、尻労小学校が保管していたナウマンゾウ臼歯 2 点・切歯 1 点及びマイマイ属 17 点(収蔵番号 1856)、産出時の調査に訪れた京都大学理学部地質学鉱物学教室が持ち帰り保管していたナウマンゾウ臼歯 7 点・下顎骨片 1 点及びヤベオオツノジカ橈骨片 1 点(収蔵番号 1975)である。

個人所蔵のナウマンゾウ化石 3 点はそれぞれ 1971 年・1973 年・1976 年に、尻労小学校所蔵のナウマンゾウ及びマイマイ属化石計 20 点は 2001 年に県立郷土館に寄贈された。京都大学に保管されていたナウマンゾウ及びヤベオオツノジカ化石 9 点は、滋賀県立琵琶湖博物館の高橋啓一氏を経て 2006 年に県立郷土館に寄贈された。

ナウマンゾウ左下顎第 2 あるいは第 3 大臼歯(収蔵番号 1975-1)から 31,470 ± 160 年 BP、ナウマンゾウ左上顎第 2 大臼歯(収蔵番号 1975-5)から 23,570 ± 130 年 BP、ナウマンゾウ左上顎第 2 あるいは第 3 大臼歯(収蔵番号 1975-7)から 25,920 ± 120 年 BP の年代が得られている。

3 考察

標高約 33m にある尻労安部洞窟の前面には、この地域に広く分布する最終間氷期最盛期(MIS5e)に形成された海成段丘面(標高 30 ~ 40m)が見られ、洞窟のある崖は最終間氷期の高海面期における海食崖で、洞窟は当時形成された海食洞と考えられている(奈良ほか編, 2015)。産地 4 の坑道もこの段丘面から掘られているが、坑道内の化石産出地点では、暗青灰色粘土や赤褐色粘土、石灰岩、チャートの礫が混在する地層が見られ、この混在層は坑道上方付近に存在する埋没したウパーレの底部堆積物と推定されている。洞窟内の後期更新世の層準の堆積物は約 39,000 ~ 20,000 年 calBP、産地 4 から産出したナウマンゾウ臼歯(ヤベオオツノジカ下顎骨含む)の年代は約 36,000 ~ 28,000 年 calBP で大きな差異がないことから、産地 4 の上方開口部もあまり高くない場所にあることが考えられる。

謝辞

本報告をまとめるにあたり、国立科学博物館の甲能直

樹氏には一部標本の同定と原稿の作成について有益なご助言をいただいた。記して厚くお礼申し上げる。

引用文献

長谷川善和・富田幸光・甲能直樹・小野慶一・野苺家宏・上野輝彌(1988) 下北半島尻屋地域の更新世脊椎動物群集. 国立科学博物館専報, 21, p. 17-36+Pl. 8
 波多野良次・田中克人・根本直樹(1999) 青森県のナウマンゾウとオオツノジカ化石についての新知見. 青森県史研究, 3, p.131-141.
 鎌田耕太郎(2000) 尻屋コンプレックス: 尻屋崎に分布する先第三紀付加体堆積物. 弘前大学教育学部紀要, 83, p.39-47.
 中島全二・桑野幸夫(1957) 下北半島尻屋崎における第四紀哺乳類化石の産出状況について. 資源科学研究所彙報, 第 43-44 号, p.153-159.
 中島全二(1958) 下北半島尻屋崎における第四紀哺乳類化石の産出状況について(第 2 報). 資源科学研究所彙報, 第 46-47 号, p.37-39.

奈良貴史・渡辺丈彦・澤田純明・澤浦亮平・佐藤孝雄編(2015) 尻屋安部洞窟 I - 2001 ~ 2012 年発掘調査報告書-. 株式会社六一書房, 東京, pp.289.
 大矢雅彦・市瀬自由(1957) 下北半島の海岸地形第 2 報. 資源科学研究所彙報, 43-44, p.113-128.
 島口 天(2001) 青森県立郷土館の長鼻類臼歯化石. 青森県立郷土館調査研究年報, 25, p.63-76.
 島口 天(2010) 青森県東通村尻屋からナウマンゾウ化石と共産したナンブマイマイ. ちりぼたん, 40(2), p.87-89.
 島口 天・高橋啓一(2016) 青森県内で採集されたウマ標本の AMS14C 年代. 化石研究会会誌, 49(2), p.82-86.
 高橋啓一・島口 天・神谷英利(2006) 青森県下北郡尻屋産のナウマンゾウ化石とその AMS14C 年代. 化石研究会会誌, 39(1), p.21-27.
 高橋啓一(2022) ナウマンゾウ研究百年. 琵琶湖博物館調査報告, 35, 滋賀県立琵琶湖博物館, pp.309.

Plate 1

- 1 ヒグマ右上顎犬歯(収蔵番号 1962-65 舌側面)
- 2 トラ右上顎犬歯(収蔵番号 1962-59 舌側面)
- 3 トラ左下顎犬歯(収蔵番号 1962-68 頬側面)
- 4 トラ右下顎第 1 臼歯(収蔵番号 1962-60 頬側面)
- 5 キタオットセイ右上顎犬歯(収蔵番号 1962-69 舌側面)
- 6 キタオットセイ左下顎犬歯(収蔵番号 1962-70 舌側面)
- 7 ニホンアシカ右下顎犬歯(収蔵番号 1962-72 舌側面)
- 8 ニホンアシカ右下顎犬歯(収蔵番号 1962-73 舌側面)
- 9 ヒグマ右大腿骨(収蔵番号 1962-57)
- 10 ヒグマ左大腿骨(収蔵番号 1962-66)
- 11 ヒグマ右踵骨(収蔵番号 1962-67)
- 12 トラ中手または中足骨(収蔵番号 1962-78)
- 13 トラ基節骨(収蔵番号 1962-76)
- 14 キタオットセイ左脛骨(収蔵番号 1962-88)

Plate 2

- 1 ナウマンゾウ右上顎骨片+第 1 大臼歯(収蔵番号 1962-63 a: 舌側面 b: 咬合面)
- 2 ナウマンゾウ右上顎第 1 大臼歯(収蔵番号 1962-64 a: 頬側面 b: 咬合面)
- 3 ヤベオオツノジカ左下顎骨(収蔵番号 1962-56 舌側面)
- 4 ヤベオオツノジカ椎骨(収蔵番号 1962-10 a: 左側面 b: 後面)
- 5 ヤベオオツノジカ右距骨(収蔵番号 1962-31 a: 外果面 b: 前面)
- 6 ヤベオオツノジカ中足骨(収蔵番号 1962-53 a: 前面 b: 後面)
- 7 ニホンジカ右距骨(収蔵番号 1962-77 a: 前面 b: 内果面)



